

イノベート・ハブ九州

ハッカソンを起点としたビジネス発掘と、人材・組織のイノベーション

新規ビジネス創出プログラム「イノベート・ハブ九州」が、IBM主催で2016年8月から9月にかけて開催されました。総勢37の企業や団体の協賛・協力により開催された大規模なハッカソン（短時間でサービスのプロトタイプを開発するイベント）で、さまざまなデータやAPI（Application Programming Interface）が提供され、最先端のテクノロジーを学びながら新規ビジネスの創出に挑む取り組みです。地方創生の深化を目指すローカル・アベノミクスの実現が政府の重要項目となっている中、参加したチームや企業・団体からは、九州全体で人材と組織を改革することに挑む強い意志と危機感が感じられました。IBMは持続的にメンタリングや技術支援を行い、グローバルを意識したビジネス創出のためのハブになることを目指します。

高まるオープン・イノベーションへの期待

オープン・イノベーションという言葉が新規ビジネスを創出する方法として期待されています。オープン・イノベーションとは、組織や企業の枠を超えてアイデアを出し合い協業する、新しい価値を生み出すためのイノベーションの方法論です。昨今ではテクノロジーの急速な発展や顧客ニーズの多様化、納期の短期化によって、自社だけではお客様のニーズに応え続けることが難しくなっ

ています。そこで、社外にアイデアやテクノロジーを求め、ハッカソンやアイデアソンを通し、オープン・イノベーションを推進する企業が増えています。

日本IBMではこれまでも、「IBM BlueHub」[1]による一般企業とスタートアップとのマッチングや、スタートアップ支援「IBM Global Entrepreneur Program」[2]、ハッカソン支援など、積極的に外部のコミュニティと関わりながらオープン・イノベーションを推進してきました。イノベート・ハブ九州

もこのようなオープン・イノベーションの新しい取り組みの一つです。

イノベート・ハブ九州の3つの特徴

イノベート・ハブ九州は、ハッカソンを起点とした産学官連携のビジネス創出プログラムです。九州は観光資源や、食、エンターテインメント、ファッションなど魅力的なコンテンツ、産業が豊富な地域であり、かつアジアにも近いため訪日外国人も増加しています。また、IBMは数十年前以上前から、九州の企業や自治

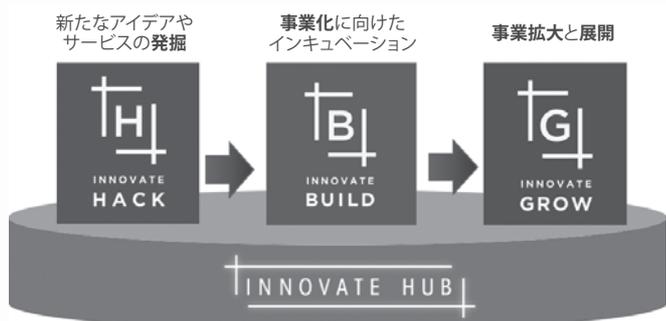


図1. イノベート・ハブ九州3つのフェーズ

表1. イノベート・ハブ九州 協賛企業提供データおよびAPI

提供企業	提供データ/API
株式会社 西日本新聞社	新聞過去記事データ/過去画像データ
株式会社 ゼンリン	地図情報開発API
株式会社 福岡・フィナンシャル・グループ	IBM FinTech共通API
ソフトバンク株式会社	Pepper 人の流動データ
株式会社 フォレストホールディングス	一般薬商品データ
株式会社 安川電機	産業用ロボット・シミュレーター ロボットCADデータ

体、大学などと連携した活動を続けています。豊富なコンテンツや産業が連携した「九州発」の地域イノベーションを生み出したいというお客様からの期待も大きいことから、今回プログラムを開催することになりました。

イノベート・ハブ九州には、3つの特徴があります。

1つ目の特徴は、一過性のイベントにせず、いくつかのフェーズに分けて持続的に支援しビジネス創出を目的としていることです。新しいアイデアやサービスを発掘する「HACKフェーズ」、事業化に向けたインキュベーションを行う「BUILDフェーズ」、海外を見据えた事業拡大と展開の「GROWフェーズ」に分け、マイルストーンを設定して進めていくのが特徴です(図1)。

2つ目の特徴は、地域性を前面に打ち出し、九州にある複数の有力企業に協賛していただいたことです。データやAPIをご提供いただき、API化できていないサービスはマスキングされたデータをIBMがクラウド環境上にAPI化して用意しました(表1)。

そして3つ目の特徴は、協賛企業のデータやAPIだけでなく、抱えている課題や業界動向などを共有し、複数回に分けた勉強会を参加者に対して実施したことです。勉強会は「IBM Bluemix」のユーザーグループである「BMXUG」の有志により開催され、地元のコワーキングスペースなどを借りてスタートアップや企業のエンジニアの方々や学生、IBMのパートナーを中心としたユーザー研究会やUOSの若手エンジニアが数多く参加しました(図2)。宮崎県など遠方からも参加があり、すべての勉強会を通して延べ600人以上のエンジニアの学びの場となりました。

コグニティブ・コンピューティング「IBM Watson」(以下、Watson)を使ったハンズオンや、提供されたデータの呼び出し方法、アイデアの創出方法として「デザイン思考」を紹介するなど新しい取り組みも実施しました。デザイン思考とは、デザイナーがデザインを行う過程で用いる手法で、近年新規ビジネスを創出する手法としてさまざまな企業で使われている方法論です。IBMはデザイン

思考を積極的に取り入れている企業であり、「IBM Bluemix Garage Method」[3]というイノベーション創出手法のメソドロジーを公開しています(図3)。今回の勉強会では、プログラミングなどのアプリケーションの開発スキルだけではなく、新しいビジネスを創出するGarage Methodの勉強会も開催しました。

ハッカソンを起点とした ビジネス創出プログラム

イノベート・ハブ九州のBUILDフェーズである「イノベート・ハック」を2016年8月から9月にかけて開催しました(表2)。「①まち・くらし」「②観光・エンタメ・スポーツ」「③ヘルスケア」「④ロボティクス」という4つのテーマに対してアイデアを応募し、選抜された40チームがハッカソンまで進みました。台湾をはじめとする東アジアからのエントリーを含む約90組の応募があり、九州において最大級のハッカソンとなりました。

ファイナリストに残った11組によるDemo Day(決勝戦)において、



図2. イノベート・ハブ九州のハッカソンや勉強会の様子

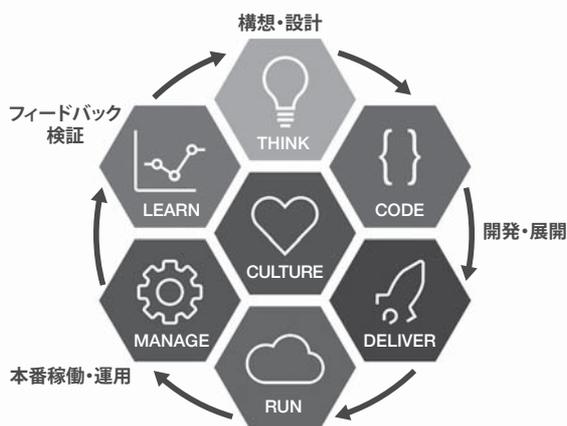


図3. IBM Bluemix Garage Method

見事最優秀賞に輝いたのは、大分の伝統企業である株式会社OECから出場したチーム「UMYAH」の「お手伝い預金」というサービスです(図4)。これは、子どものお手伝い報告をトリガーに親子間の送金を行うサービスで、ゲーム感覚で楽しみながらお手伝いや預金を学ぶことができると同時に、銀行取引をより身近に感じることができます。使用したのはWatsonの自然言語認識のAPIや、FinTech共通APIを使ったサービスでした。FinTechとは金融を意味するファイナンス (Finance) と、技術を意味するテクノロジー (Technology) を組み合わせた造語で、UMYAHチームが作ったサービスのようなテクノロジーを駆使した新しい金融サービスのことを言います。

このサービスで使われたFinTech共通APIは、残高照会、入出金明細照会、口座情報照会といった銀行の基本機能を提供し、既存のインターネット・バンキングをアプリケーション間で接続するAPI群です。LINEのbot APIとも組み合わせ、斬新なアイデアとともにFinTechというトレンドを取り入れたクオリティが高い作品となり、審査員から高い評価を獲得しました(図5、図6)。

■ イノベート・ハブ九州がもたらした衝撃

イノベート・ハブ九州は地域性を全面に出したことにより、37の企業や団体が協賛・協力するハッカソンとなりました。ファイナリストに残ったチームは、今後BUILDフェー

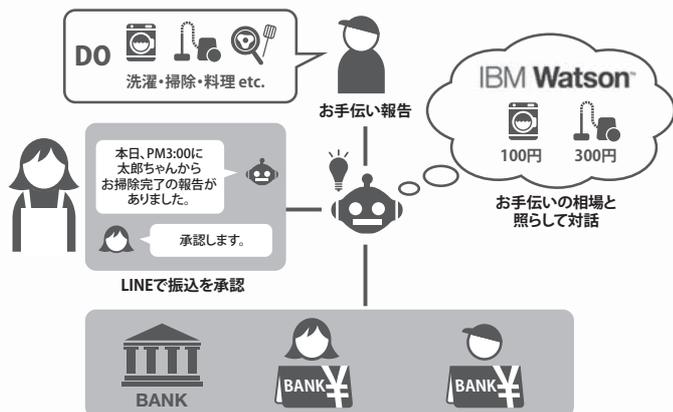
ズにおいて継続的にIBMや協賛企業とのメンタリングを通してブラッシュアップされていきます。イノベート・ハブ九州はビジネス創出だけが目的ではなく、IoTやWatson、ロボティクスなどの最新テクノロジーを活用した新規事業やスタートアップなど、イノベーションが生まれやすい地域を作っていくことも目的としています。

このイベントがきっかけとなり、既に変化が起き始めています。協賛各社での新規ビジネスの検討が開始されたり、九州内外から多くのお問い合わせをいただいたりしています。また、BMXUGの参加人数も増えており、Watsonやクラウドを導入し、ファイナリストに残ったチームとの協業に乗り出す協賛企業も出てきています。

表2. イノベート・ハック開催概要 (BUILDフェーズ)

募集対象	チーム単位 (個人・法人問わず)	
開催規模	エントリー約90組 → ハッカソン40組選考 → ファイナリスト11組	
スケジュール	Day1 事前説明会&アイデアソン	2016年8月6日
	Day2-3 ハッカソン	2016年8月27-28日
	Day4 Demo Day (決勝戦)	2016年9月6日
テーマ	①まち・くらし ②観光・エンタメ・スポーツ ③ヘルスケア ④ロボティクス	

【子どものお手伝いをトリガーに自動で行う親子間送金サービス】



FinTech共通APIで口座振替を実行

【システム構成図】

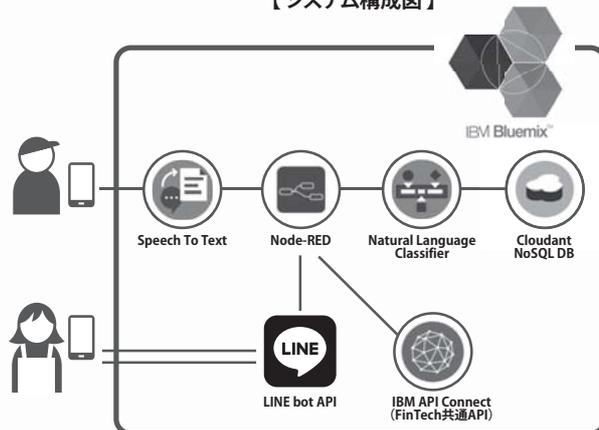


図4. お手伝い預金のサービス概要とシステム構成図



図5. 審査員とDemo Day(決勝戦)の様子

ムーアの法則によりテクノロジーの性能はわずか数年で飛躍的に向上し、さらにはクラウドやIoT、AIなどの技術が発展し、個人レベルでもイノベーションを起こせる時代になりました。しかしながらこうした新しいテクノロジーを企業が使いこなし、サービスとして展開するところまではまだ至っていないというのが現状です。これは企業における人材や組織が、急速に進化するテクノロジーに柔軟に対応できていないことが原因の一つと考えられます。

人と組織の文化に変化を起こし、早めに市場投入し失敗から学び改善する開発手法(アジャイル)を採用しなければ、今後は市場に遅れを取ることになります。大きな企業であればあるほどリスクを避ける傾向があり、アジャイルな文化が取りづらくなりま

す。そうしているうちにスタートアップは新しいテクノロジーを取り入れ、少数精鋭でアジャイルに市場投入し既存企業を破壊していきます。

今求められているのは、テクノロジーに対する人と組織の変化です。特に、東京圏以外のIT市場は今後も格差が拡大し[4]、同時にテクノロジーの活用についても格差が広がるものと想定されています。

企業の文化に変化を起こすことは決して容易ではありません。しかし、イノベート・ハブ九州のようなイベントをきっかけとして、複数の企業がお互いに危機感を持って変化に対して歩み出すことができれば、流れは変わってくるでしょう。最優秀賞に輝いた大分の伝統企業OECが見せたのは、「変わらなければならぬ」という危機意識からくる、変革

に向けた強い決意でした。

今後も引き続き、IBMは、九州の皆様とともにBUILDフェーズ、GROWフェーズを進めてまいります。

[参考文献]

- [1] IBM BlueHub, <http://www-07.ibm.com/ibm/jp/bluehub/>
- [2] IBM Global Entrepreneur, <https://developer.ibm.com/startups/>
- [3] IBM Bluemix Garage Method, <https://www.ibm.com/devops/method/>
- [4] IDC, 2016年 公共医療教育分野における第3のプラットフォーム需要動向調査, #JPJ40589216.



日本アイ・ビー・エム株式会社
マーケティング & コミュニケーション
BlueHub
アドバイザー・IT スペシャリスト

森住 祐介
Yusuke Morizumi

日本IBMにてスタートアップ支援に従事しながら、クラウドの講演や勉強会を開催。IBMの技術記事であるdeveloperWorksの日本語版編集長として、最新テクノロジーの動向をデベロッパーに届けている。



図6. 受賞者の皆様